Latvija

日本ラトビア音楽協会ニュース

第17号
（2010年1月29日発行）

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Tel·Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@jcom.home.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

第4回ラトビア大使館サロンコンサート

C・de・ロスチャイルドさんが熱唱



当協会と在日ラトビア共和国大使館共催の第4回サロンコンサートが11月13日、ラトビア共和国大使館で行われた。今回は先ずラトビア音楽にも造詣の深いピアニスト・北條陽子さんが登場、続いて英国から来日中のソプラノ歌手、シャロット・ド・ロスチャイルドさんが風呂本佳苗さんのピアノ伴奏で熱唱した。

北條さんは、アルヴィツ・ジリンスキスの作品に続き、ゲオルグス・ペレーツィスの作品を演奏し、ラトビア人作曲家の奥深い世界を優れた音楽性と卓越したテクニックで見事に表現した。

ロスチャイルドさんは、自ら日本語と英語で名家・ロスチャイルド家に触れながら表情たっぷりに曲目解説を行い、前半、メンデルスゾーン、ロスチャイルドコレクション、ロッシーニに続いてラトビアの歌を歌い、後半は日本の名曲の数々を完璧な日本語で日本人歌手よりはるかに情感豊に歌い、聴衆を完全に魅了した。風呂本さんのピアノと完璧な呼吸の合致もあって、文字通り至福の時間。ラトビアの歌は、協会合唱団「ガイスマ」が練習中の作品が2曲歌われ、本当に嬉しいプレゼントになった。

今回も終演後、出演者·聴衆の心が完全に一つになって懇親·談笑の楽しい時間を過ごした。コンサートホールでは味わえない何とも贅沢な一夜で、ヴァイヴァルス大使もそれぞれの演奏を絶賛し、「本当に素晴らしいリサイタルだった。音楽協会に感謝したい」と快心の笑みが続いた。

◇

この日の演奏曲目は次の通り。

北條陽子（ピアノ）
ピアノのための作品集「子供の頃の情景」（アルヴィツ・ジリンスキス）
から秋のエレジー、奇怪な踊り
組曲第4番（ゲオルグス・ペレーツィス）
《アンコール》
3つの小品より「ブルレスカ」（クレメント・スラヴィッキー）

シャロット・ド・ロスチャイルド（ソプラノ）
ピアノ伴奏：風呂本佳苗
歌の翼に（メンデルスゾーン）、ロマンス（M.D.ロスチャイルド）、蝶々（M.D.ロスチャイルド）、何も言わずに（ロッシーニ）、頭を上げて、白髪のお母さん（R.パウルス）、我が祖国に（R.パウルス）、遠くへ行きたい（詞：永六輔　曲：中村八大）、ちんちん千鳥（詞：北原白秋　曲：近衛秀麿）、さくら横丁（詞：加藤周一　曲：中田喜直）、初恋（詞：石川啄木　曲：越谷達之助）赤とんぼ（詞：三木露風　曲：山田耕筰）、かやの木山（詞：北原白秋　曲：山田耕筰）、かんぴょう（詞・北原白秋　曲：福井文彦）
《アンコール》
早口ことばの歌（曲：大中恩）

年頭メッセージ

ラトビア共和国特命全権大使 ペーテリス・ヴァイヴァルス

価値観を同じくする日本と、より緊密な協力関係を築きたい



新年を迎え、天皇、皇后両陛下、鳩山首相、日本の国民の皆様、日本ラトビア音楽協会の皆様に心からご挨拶を申し上げます。

日本・ラトビア関係につきましては、2006年に駐日大使館が開かれて以来、天皇、皇后によるラトビアご訪問など交流を深めてまいりましたが、09年はラトビアにとってさらなる飛躍の年となりました。特に、日本のパートナーとの協力により、東京・リガ間で史上初のチャーター便の運航を実現。数多くの日本人関係客の方々が私たちの国を訪ねてくださいました。将来的には、皆様にラトビアを一層身近に感じていただくため、日本・ラトビア間の定期便運航を目指し、日々努力を注いでおります。

今後とも基本的な価値観を同じくする日本と、より緊密な協力関係を築いてまいりたいと望んでおります。

新国際版「マダムバタフライ」（世界初演）5月に東京で出演歌手オーディション

岡村喬生副会長が演出



来2011年、新国際版・世界初演「マダムバタフライ」が岡村喬生当協会副会長の演出で、イタリア、プッチーニフェスティヴァル財団と共催で3回の公演が行われます（2011年8月・トーレ デル ラーゴの新野外湖畔劇場＝3200席）。初演以来100年以上も続いているこの名作の日本誤認歌詞を、岡村氏が世界で初めて改訂した上演です。主要出演者は、今年5月末に東京イタリア文化会館で5日間、出演者オーディションにより選定されます。楽歴、団籍、年齢、居住地などに一切制限がありません。出演が決った方々には、国際航空費、2週間のイタリア滞在費の他に、蝶々さんに120万円、すずき・ごろーに各60万円、9名の芸者に各45万円の報酬が支払われます。岡村副会長は「このプロジェクトを日本の為に是非大成功させたい」と強い意欲で臨んでおられるが、お知り合いの歌手の方々に推奨ください。詳細は「岡村喬生」及び「NPOみんなのオペラ」のHPを参照してください。当協会としても強く後押ししたいと念じています。

平成22年総会・新年会は2月7日（日）学士会館です。

メールやHPでご承知だと思いますが、今年の総会・新年会は2月7日（日）12時から神田錦町の学士会館で行われます。楽しく充実した懇親会になるよう、会員各位の積極的参加を切望しております。

【情報断片】第4回サロンコンサートのカラー写真とロスチャイルドさんら出演者のプロフィールを、HP11月13日のトピックスに掲載しています。是非ご覧ください。

6年目の日本ラトビア音楽協会

専務理事　加藤 晴生

新年おめでとうございます。

さて、当協会は昨年9月、設立6年目に入りました。日本とラトビア共和国との親交は急速に深まってきましたが、私たちのささやかな活動が、その一端を担えたとすれば誠にご同慶です。幸い皆様のご協力とタイミングにも恵まれ、概ね順調にやって来ることができました。今年はこれまでやってきたことをレビューしながらテーマに取組んで行くつもりです。

私たちは音楽を通じてラトビアとの交流を深めることを目的としていますが、ラトビアの知名度が上がることなら出来るだけ取り上げることにしています。昨年はゴドマニス首相の来日から始まり、ダウゼ国会議長の来日と早稲田大学での「ラトビア歌と踊りの祭典」の写真展、ラトビア料理を賞味する会、Battle of Riga、ソヴィエト・ストーリーの鑑賞、JALのリガ直行便実現、大使館で初めての独立記念日祝賀会、海外投融資財団によるバルト・三国投資セミナー、外務省によるバルト・ビジネスセミナーなど多彩な行事がありました。順序が逆ですが音楽関係では作年もマリス·ヤンソンス、ミッシャ・マエスキー、ギドン·クレーメル等が来日。当協会ではピアニスト、ディーナ·ヨフェや若手のホープ、ソルベイガ·サルガ等の演奏会を後援しました。

翻って、昨年は当協会の会員が良い仕事をしました。「ガイスマ」の指揮者山脇卓也さんは「お江戸コラリアーず」を指揮して全日本合唱コンクール金賞を獲得、在ラトビア会員のアイラ・ビルジーニャさんはリガ大聖堂少女合唱団を率いて難関で知られるスペインのトロサ·コンクールでグランプリを獲得しました。非会員ですが浅井美紀さんは日本人として初めてリガ大聖堂のオルガンを演奏し、チェンバロ奏者・家喜美子さんはラトビア音楽アカデミーのオルガンホールでのリサイタルで絶賛を受けたとの報告が現地会員から届いています。立場上、非会員ですが、大使館のオルロフスさんが日本語スピーチコンテストで特別賞を受賞しました。

広報は協会運営上の主要な柱です。協会設立の初期からご支援くださっていた大鵬薬品工業様が経営方針のご都合で広告掲載を中止された時は、私たちの活動の中で重要な位置づけをしてきた協会ニュース「Latvija」の発行継続が危惧される事態となり困惑しました。しかし、広報活動はLatvijaのページ数は減るとしても新しく別の方法との組み合せで対処し、きめ細かくスピーディな情報の提供を目指しています。「Latvija」と共に広報の重要なツールであるHPは一昨年11月中旬に再構築しましたが、ニュースのスピードをモットーとしアクセス数が急増しています。協会活動の一環としてのラトビア語教室、合唱団ガイスマ、サロンコンサートの各プロジェクトは順調に展開しています。ラトビア語の受講生たちは皆若々しく、ラトビア語ばかりでなく、ラトビア共和国全体に強い関心を持ち、経済セミナー、観光セミナーなどにも参加、レセプションなどでは積極的に他国の人たちとも会話を楽しんでいます。クラスの増設を検討中です。歌は力、強い伝播力、ラトビアを日本人に認識させるには効果的なツールです。「ガイスマ」はラトビアの歌を歌うために結成、団員数44名の混声合唱団に成長しました。近く、協会のHPメインメニューに「ガイスマ」と「ラトビア語教室」を加え、団員増とラトビア語の普及を目指します。

一昨年はじめた「サロンコンサート」はこれまで4回実施。今年は3回開催の予定です。

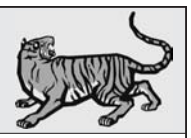
当協会の当面の目標は、①財政基盤を強化するために会員数300名体制を確立する。②本年中に第一回ラトビア音楽祭開催を目指し、「ガイスマ」のデビューステージとする。③2011年実現を目処にリガ大聖堂少女合唱団招聘準備を開始する。④2012～3年ガルータのカンタータ実現に向けて活動を再開する。などです。

順不同で年頭所感を述べさせて頂きました。末筆ながら、皆様のご健勝な一年になりますよう祈念申し上げます。

【情報断片】新年名刺広告にご出稿頂いた方々に厚くお礼申し上げます。配布が2月初旬になると思いますので、「寒中お見舞い」にさせていただきました。



寒中お見舞い　今年もよろしくお願い申し上げます



藤井　威

日本ラトビア音楽協会会長
みずほコーポレート銀行常任顧問

藤井　威
明子

日本ラトビア音楽協会
専務理事　加藤　晴生
TEL&FAX　04－7132－5423
Email　katohr@jcom.home,ne.jp
katohr@earth.ocn.ne.jp

九州ラトビア支援の会
会　長　山本　徳行
（在北九州）スウェーデン王国名誉領事
（有）ケイ·エム·エス·コーポレーション代表取締役
801－0841　北九州市門司区西海岸1－2－18
Ｔｅｌ　：093－322－1123　Fax: 093－322－2525
E-mail：consul-y@chive.ocn.ne.jp

福島県芸術文化団体連合会副会長
日本ラトビア音楽協会顧問
福島市音楽堂運営委員長
板垣　忠直
〒960－0102　福島市鎌田字舟戸17
TEL　024－553－2745　FAX　024－554－0647
E-mail　yanakyo@d6.dion.ne.jp

遠藤税理士事務所
日本ラトビア音楽協会常務理事
税理士　遠藤　守正
〒229－0014
神奈川県相模原市若松1－14－10
TEL　042－745－3334　FAX　042－740－4725
Email　0424668801@jcom.home.ne.jp

出演歌手選抜、国際オーディション
新国際改訂版「マダマ　バタフライ」世界初演
第57回イタリア、プッチーニフェステイヴァル公演
NPOみんなのオペラ／プッチーニフェステイヴァル財団、共催
★'10年5月24(月)～28日(金)。29日(土):結果発表／合格者披露コンサート
★イタリア文化会館―東京（九段下駅より徒歩10分。靖国神社前）
★審査員：委員長　カルロ・ペスタ（プッチーニフェステイヴァル音楽監督）
岡村喬生（NPOみんなのオペラ芸術総監督―演出）
★対象とギャラ(1公演)：蝶々さん・￥40万、すずき／ごろー・￥20万、芸者9名（1名）・￥15万。他の役はプッチーニフェステイヴァル財団がイタリアにて選抜
＝＝詳細問い合わせ：NPOみんなのオペラ事務局　Tel / Fax:03-3994-3552＝

魚住コーラス「わかくさ」
指揮者　嵯峨山まり子

新年あけましておめでとうございます。
ラトビア投資開発公社（www.liaa.gov.lv）は2009年4月より日本語ホームページを運用しております。お問い合わせページもありますので、ご利用下さい。それでは、皆さまも今年も何卒宜しくお願い申し上げます。
ラトビア投資開発公社日本コーディネーター　**長塚　徹**

草月流
1級師範総務
石　川　光　翠
〒190－0001 立川市若葉町2－43－23
Tel/Fax　：042－534－7668
e-mail　　：ikerpepp@blu.m-net.ne.jp

朝日測量開発株式会社
代表取締役　市川　貞夫
東京都新宿区北新宿一丁目27番12号
〒169－0074　グランドステータス3階
TEL　：03－3366－3311
FAX　：03－3366－2311

バリトン歌手　山本　健二
童謡・唱歌・抒情歌100曲以上がH.P.で聞くことが出来ます ―無料です―
（「グー・ヤフー」で山本健二検索）

駐日ラトビア大使館·日本ラトビア音楽協会共催
ラトビア語教室
講師　堀口 大樹
連絡先　植木佐代（事務局長）
TEL＆FAX　03－3751－0134
Email　uekisayo@beige.ocn.ne.jp

日本ラトビア音楽協会合唱団
ガイスマ
指揮者　山脇 卓也
連絡先　髙仲和子（幹事長）
TEL　03－3339－3139
FAX　03－3339－3159
Email　t.kaako@nifty.com

音楽を通しより力強い平和への希求を!
原　健之

「欧州の情勢は複雑怪奇なり」は「ソ連のエイプリル・フール」か？

外務省外交史料館　白石 仁章

これを書いているのは、2009年があと数日で終わろうとする時期だが、フト振り返ると今年が日本にとっても、ラトヴィアにとっても激動の年からちょうど70周年にあたっていたことにお気づきだった方はどの程度いただろうか？70年前の1939年8月23日に結ばれた独ソ不可侵条約が全世界に衝撃を与え、その直後9月1日にはドイツ軍がポーランドに侵攻、これに対して同3日には、イギリス、フランス両国がドイツに宣戦布告し、第二次世界大戦が始まったのだ。さらに、9月17日には独ソ不可侵条約の秘密条項にもとづきソ連もポーランドに侵攻し、中欧の大国＝ポーランドが短期間に独ソ両国に分割されてしまった。しかし、このポーランドの悲劇は、周知のようにその後に続く想像を絶する悲劇のプレリュードに過ぎなかった。

今回は、独ソ不可侵条約が日本、ラトヴィア両国に与えた影響について、考えてみたい。

当時の日本にとって、共産主義の台頭に対抗するため防共協定を結んだ相手国、友好国だと思っていたドイツが、共産主義の本家ともいうべきソ連と突然手を組んだことは驚天動地の出来事だった。その衝撃により、日本外交は完全なパニックに陥り、わずか5日後、当時の平沼騏一郎内閣は、「欧州の情勢複雑怪奇なり」との有名な声明を残して総辞職した。

また、各国に駐在していた日本の外交官達からも駐在国の狼狽ぶりを伝える電報が続々と届いた。駐ラトヴィア大鷹正次郎公使からも、ラトヴィア側が「当初はソ連側が発狂せるかまたはソ連の4月1日なりや」と驚いたことが報じられた。「発狂」、「エイプリル・フール」とは、「複雑怪奇なり」にも匹敵する驚きの表現だと言えよう。



第二次世界大戦中のドイツによる占領期も含め、ソ連による併合の悲劇の記憶を薄れさせないために建てられた占領博物館前の像。何やら悲しげに見えるのは、筆者一人ではあるまい

そして、ポーランド分割後にソ連は、独ソ不可侵条約の秘密条項に基づき、ラトヴィアを含めバルト三国それぞれに相互援助条約を強要し、翌年の併合に向けての準備を着々と進めたのであった。

そのような日本、ラトヴィア両国を含め、世界的に衝撃的であった事件から70周年であったにもかかわらず、そのことがほとんど顧みられなかったことは、歴史を学ぶ者の一人として悲しい限りだ。

この一文を皆様が読んで下さる頃には、2010年が始まっていることであろう。ソ連がバルト三国を併合し、日本の友好国であったラトヴィアにさらなる悲劇が襲った年からちょうど70年となる。2010年こそは、この悲劇の歴史を思い起こし、戦前の両国間における友情に思いを馳せ、さらなる両国の友好的感情が高まることを期待してやまない。

音楽と私

マークス寿子

小学校（国民学校）に入ったのは真珠湾攻撃の翌年だったから、ロクな音楽教育は受けなかった。「紀元節の歌」のような儀式用の歌だけ習った。大人も子どもも音楽など聴いていられない時代だった。そして、戦争が終ると、ラジオから次々と明るい流行歌が流れ出した。「りんごの唄」や「青い山脈」だった。子どもたちもすぐに覚えて歌った。もっとも、「湯の町エレジー」を歌った時には、母にこっぴどく叱られた。そして、戦前の唱歌「月の砂漠」や「浜千鳥」もラジオで覚えた。歌うだけではなく、自分流の振りをつけて誰も見ていない所で踊った。母は娘時代に覚えた「枯れすすき」や「赤城子守歌」を台所で歌っていた。「愛染かつら」という歌もあったと思っていたが、本当の曲名は「旅の夜風」だと、先日友人に連れていかれたカラオケ店で知った。そんな歌が六十年後の今でも歌えるから不思議だ。

そんな貧しい音楽環境を経て、いきなり、ヴァイオリニストになりたいと願う時代がやってきた。それは小学校六年生の時のこと、お使いの途中、見知らぬ家のラジオから流れてきたメンデルスゾーンの「ヴァイオリン協奏曲」のためだった。ヴァイオリンという楽器を見たこともなく、協奏曲の意味も知らず、その美しい音楽に魅せられて、曲が終るまでその家の前に立ちつくしていた。

中学校の音楽の先生は田舎には珍しい音楽学校出のチェリストだった。その先生の指導で初めてヴァイオリンに触れ、弾き方を習った。その後は毎日、たどたどしくヴァイオリンを練習した。父の転勤で高校は伊丹市で過した。近所に声楽家の婦人がいて、彼女の世話でヴァイオリンを「辻先生」に習うことになった。当時の日本に、二人のトップ女流ヴァイオリニストがいて、一人が巌本真理、もう一人が辻久子だったが、「辻先生」は久子のお父さんだった。スパルタ教育で知られていた。そんなことは露知らず、辻先生の許へ通ったのだが、先生は意外にも優しいおじいさんだった。才能のない子にもそれなりの教え方をする人だった。先生は「一生懸命おやり。そうすれば交響楽団に入れるよ」と言ってくれた。その言葉にもかかわらず、私は高校二年でヴァイオリンをやめた。先生の他の弟子たち、十歳かそこらの女の子がメンデルスゾーンを見事に弾きこなすのを聴いて自分の才能のなさを知ったからだった。そして私は大学受験に没頭した。以来、ヴァイオリンに手を触れたことはない。そしてその決断を後悔したこともない。それでも、今もってヴァイオリン曲を聴くのは大好きだ。



（作家・秀明大教授）

【情報断片】矢田廣氏は5面の矢田寛子さんとご夫婦で、ピアニスト・ちひろさんのご両親です。小さいですがご一家の写真を5面に掲載しました。

時節寸評

長寿及び下り坂人生についての一考察

矢田 廣

日本人の100歳を越えた人の人口が4万人を上回り、特にこの1～2年は1年に約1万人増えているという。この調子で行けば向こう5～6年で10万人を突破する勢いである。そのこと自体は大変お目出度いことである。ただ五体健全なら言うことはないが、普通の人は50歳～60歳を過ぎる頃から足腰、臓器を含めて何らかの故障が生じ、医者の厄介になることも少なくない。昨今の医療の進歩で、一般に70歳～80歳は、この状態で大した努力をしなくても、やっていけると言われているが、80歳～90歳、さらに90歳以上になると、特別な人を除き、個人的に健康維持についてかなり努力しないと、長生きしても折角の一度の人生を楽しく過ごすことが出来ないようである。では何をどう努力すればいいのか。まずは①移動の自由を確保するために足、腰の衰えを遅らせること②ボケの進行を防ぐための努力をすること。③声を出して人と積極的に会話をすること。

①については先ずは早朝に1日1時間半程度の散歩だが、ウイークデイの昼間、スポーツクラブで、自分のペースで部分的に脚と腰を弱らせない運動をする。更に水中ウォーキング等をして、最後に風呂に入って帰れば最高である。②ボケ防止対策は毎日記憶すること、勉強することである。語学を勉強することが一番良い。ラジオ、インターネットも活用して一日に少しずつ記憶することが良い。因みに私は、最近ではスペイン人と友達になり、スペイン人とインターネットをやっている。文章を書くために辞書を引くことも億劫でなくなった。③毎日家族を含めて1日最低10人の人と会話をすること、できるだけ笑うこと。私は毎月落語を聴きに行く。笑い涙が出ても大いに結構である。

人間の体は、古くなったポンコツ自動車と同じ。部品は交換できない。忍び寄る足腰の衰えを防ぎ、ボケ対策等を実践することは、車の両輪のようなもので、どちらが欠けても楽しい人生は送れない。末永く愉快な人生を送るためには、集団で協力して助け合い、共に努力することも必要だと思っている。

（紙面の都合で抄録にさせて頂きました・編集部）

【情報断片】アイラさんとリガ大聖堂少女合唱団の来日公演が2011年に実現するかも知れません。当協会で全面的にサポートしたいと念じています。

指揮者のアイラさんがリガ市民栄誉賞第1号受賞

トロサ合唱コンクールでグランプリ獲得　リガ大聖堂少女合唱団

お馴染みのアイラ・ビルジーニャ（Aira Birziņa）さんが、リガ市民栄誉賞第1号を受賞した。同女史が指導・指揮するリガ大聖堂合唱学校（RDKS）少女合唱団が、世界的にも名高いトロサ合唱コンクール（2009年10月28日～11月1日・スペイン）でグランプリを獲得しその栄誉を称えられたもの。

RDKS少女合唱団は、児童合唱部門で1位、全参加団体から選ばれる「オーディエンス賞」を獲得、さらにコンクールのグランプリを獲得して、2010年に行われるヨーロッパグランプリ出場権を得た。

審査委員長のサラソラ氏はRDKS少女合唱団について、「合唱団は舞台の雰囲気に魔法をかけた。歌が始まると、実際の音が来ているのかわからないような歌声で、会場全体が不思議に包まれた印象を受けた。少女たちの演奏は自然で、その裏に大変な練習とすばらしい合唱法があることが見て取れた」と絶賛している（日本の松下耕氏も審査員の1人）。

アイラさんは、1994年に合唱団Ausmaと、2000年に女声合唱団Dzintarsとこのコンクールに出場しているが、少女合唱団を率いての出場は今回が初、さらに初のコンクール優勝となった。「非常にレベルが高い他団体の中で、こんなに高い評価を得られるとは思っていなかった。ラトビアの合唱音楽を披露できた機会であったとともに、聴衆の反応もよく、感謝したい。」と、コンクールの結果に大変満足し、来年のヨーロッパグランプリに向けたレパートリーを考え始めている。

「誇り高きジンタルスとともに」

アイラさんは2009年12月4日付の独立朝刊新聞（Neatkarīgā Rīta Avīze）のインタビューに応じた。

1999年からラトビア有数の女声合唱団であるジンタルスの現指揮者を勤め、ラトビア歌の祭典の総指揮者の一人でもあり、ラトビア音楽アカデミー助教授、リガ大聖堂合唱学校（RDKS）少女合唱団指揮者を勤める。ジンタルスの指揮者を1959年から1999年まで勤めたラトビア有数の女性指揮者アウスマ・デルケーヴィツァ（Ausma Derkēvica）から指揮者の座を譲り受けたアイラさんは、自分がかつて歌ったことのないジンタルスで指揮者をすることに当初戸惑ったという。「ホールに入って、挨拶をし、歌うために起立してもらうようにお願いしたら、大きな声で“起立？”と言う声が聞こえてきました。彼女たちは練習で立って歌ったことがなかったのです。でもその時は立って歌ってもらうようお願いしました。これがジンタルスとの最初の出会いです」と、美しくも苦労の多い10年の始まりを思い出した。

2009年12月5日、コンサートホールAve Solで、デルケーヴィツァ女史生誕80歳を記念する「ジンタルス100」と題されたコンサートが行われた。ジンタルスは創立62年目を迎えるが、この100という数字は、デルケーヴィツァ女史の80歳に、ビルジーニャ女史と、ピアノ奏者でコンサートマスターでもあるマールティンシュ・ジルベルツ（Mārtiņš Zilberts）のジンタルス就任10周年を足し合わせたものである。

コンサートは二部構成で、ジンタルスの思い入れが特に強いE.Melngailis、P.Barisons、P.Dambis、J.Graubiņšなどラトビア人作曲家による合唱曲が解説付きで演奏された。

インタビューでは、彼女の指揮するRDKS少女合唱団が11月にスペインのトロサで行われた第41回国際合唱音楽コンクールで総合優勝を飾ったエピソードも語られた。

「コンクールが終わってからいろいろな人に賞賛の言葉をいただいています。リガ市議会からは、リガの名前を世界に広めたことに対して、創設されたばかりの市民栄誉賞第1号を受賞しました。コンクールに向けては限界までの練習と自分との闘いでした。コンクールの前にスペインとフランスでコンサートを行いましたが、疲れが重なった上に、10歳から16歳までの女の子たちの中には、両親を恋しがってくる子もいました。コンクールで、歌い出すのではなく、泣き出してしまったらどうしようとも思ったほどでした」。

しかしコンクールの演奏後、審査員を務めた同じラトビアの合唱指揮者Māris Sirmais氏は、「合唱団が歌にすべてをかけていることが伝わってきた。会場全体がベールに覆われるような感覚があった」と話したという。

金融危機の打撃、若者の合唱離れの傾向があって、歌と踊りの祭典への影響が懸念され始めているが、ビルジーニャ女史は「ラトビア人は1人ではあまり歌わないが、外に出て仲間たちとは歌う。ラトビア人は話す勇気はあまりないが、合唱がその勇気を与えてくれる」と話し、若い合唱団や指揮者、関係者が2013年の祭典に向けて準備をしていることを最後に強調した。


E/APRITĒ　2009. 12. 04　izklaide@nra.lv
epnajām dzintarietēm
AIRA BIRZIŅA
DOPINGS. Aira Birziņa: «Lielu optimismu es gūstu no darba ar bērniem. Rīts man sākas ar stundām Domra kora skolā, un ar bērniem notiek tik daudz negaidītu situāciju. Ir jābūt gatavam, ka šiverē brīdī kāds var pieskriet bērnelis un, kā piemēram, paglāpājā neslīkā bija, priecīgi teikt: «Skat, kur vanaksunē» Tāpēc mani nevar pārsteigt tas, ja vaidžu mazna nodokļus teju vai katru dienu... Un vēl – strādājot kopā ar bērniem, esmu iemācījusies būtisku lietu – ja vajag, tad sabarmies, bet tad ir miers, un tūlīt strādājam uz citas notu-

（堀口大樹氏の翻訳から要約）

卒論に『ラトヴィアにおける歌・合唱』

「ガイスマ」の森川はるかさん　30000字の力作



立教大学を今春卒業する「ガイスマ」（当協会合唱団）の森川はるかさん（文学部史学超域文化学専修）が、卒業論文に『ラトヴィアに於ける歌・合唱～祭典及び生活を通じて～』を執筆、完成した。30000字に及ぶ大冊で、バルト三国の人々が歌や合唱が民族のアイデンティティ形成に大きな役割を果している明白な事実を、特にラトヴィアでの生活・文化・言語・民族問題などを分析しながら論述する極めて興味深い内容。

森川さんは、高校時代に3年間合唱を経験する中で、バルト三国の合唱曲に独特の価値観に基づく魅力に気付いた。美しいハーモニー、柔らかな言葉の響き、そして歌の背景にある思いがその合唱を通じて伝わってくる中から、日本人にはない特別なものを感じたという。「歌の国」「歌で独立を果した国」と呼ばれるバルト三国が、歌で民族の団結・独立を果した歴史に大いに興味を持った。

大学2年の時、バルト三国を旅したことが研究テーマを決めるきっかけになった。「バルト三国の人々と歌や、伝統的な民族文化の行事を通じて、どのような生活の一部として接し認識しているのか。その意義については、またバルト三国の人々を対象にした行事と他民族との関係はどうだったのか。歴史的、文学的、民族意識的な視点でとらえ、今日の生活の中でどのような位置づけで人々は接しているか」を突き詰めて明らかにしようと…。

とりわけリーガでラトヴィア人青年と終日行動し、リーガ大聖堂で男声合唱を聴きに行ってCDを購入したことにより、ますますバルトにおける合唱音楽や人々の歌の位置づけに興味を掻き立てられた。三国の中でも特にラトヴィアは一番長く滞在した国であり、高校時代にこの国の合唱曲を多く歌ってきたこともあって、主な研究対象のフィールドに選定することにした。

内容は、ラトヴィアの概要と歴史を詳述することから始まり（第1章）、第2章では2008年歌と踊りの祭典を、歴史を振り返りながら独自の視点で分析する。さらに第3章「生活の中での歌と合唱」で、首都リーガの暮らし、夏至祭（自ら取材）などに触れ、最終の第4章「今後のラトヴィアの展望」では、歌の祭典、合唱の行方を探る。論述の一部に、近年若年層に見られる「合唱離れ」についても触れているが、筆者は「バルト三国民族」のアイデンティティを誇りとして、これを守り続け受け継いで欲しいと結ぶ。

◇

この論文ではエストニア、リトアニアについても同様の論旨を展開している（筆者はエストニアの歌と踊りの祭典、リトアニアの千年歌と踊りの祭典も取材した）。

※全文に関心のある方は編集室へ連絡ください。

会員近況短信

美しいラトビアの歌を歌い続けたい
嵯峨山まり子（指揮者）



魚住コーラス「わかくさ」という小さな合唱団の指揮をしております嵯峨山と申します。

11月3日に明石市の「音楽の集い」でKas kaitēja nedzīvot (i)を歌いました。発音は来日されたリガ大聖堂少年合唱団の通訳の方に教えていただきました。これからも美しいラトビアの合唱曲を歌っていきたいです。

外務省を定年退職後ラトビアへ
長塚 徹（ラトビア投資開発会社）

2005年外務省を定年退職、その後ラトビアに戻り、ラトビア投資開発公社日本コーディネーターに就任、今度はラトビア側から両国交流、特に対日輸出を促進し、日本からの投資を実現するために働いています。在日ラトビア大使館商務参事官ドミトリイス・ベロウーソフスと分業する形です。写真は、8月に来訪したJAL・JTBツアー公式訪問団に同行し、大手乳製品会社リーガツ・ピエナ・コンビナーツ社を訪問した際に撮りました。（前列左端が筆者）



ラトビアの美しい音に魅せられて
谷川 吉美（桜友女声合唱団責任者）



ラトビアの美しい音の世界に惹かれて合唱団に参加させていただきました。練習は山脇先生の丁寧で優しいご指導に楽しく歌えてしまいます。ラトビア語は堀口先生の分りやすいご指導に口元，声に息を止めるほど夢中で学んでいます。

音楽の中にラトビア語が自然に出来るような気になり、合唱の練習時間は充実しています。

団員の方々も和気あいあいで嬉しく思います。私事では夏から仕事が8時までになり思うように出席出来ず困っています。

朱鷺（トキ）の美しさに感動
宮尾 益治（新潟市在住）

一昨年、新潟県佐渡島で放鳥された国際保護鳥の朱鷺（トキ）のうち、雌の4羽が海を越えて本土に渡っています。そのうち1羽が昨年7月から11月まで、私の住んでいる新潟市西区に棲みついていました。





日本海に近い住宅地の松林をねぐらにし、朝、餌を求めて10キロほど離れた田圃へ出かけ、夕方5時ころに戻る生活を続けていました。場所は、我が家から車で10分。私もカメラを携えて、何回か見に行きました。

夕陽を浴びて上空を飛ぶ朱鷺の下羽は鮮やかな朱色です。その美しさに感動しました。こんな身近に朱鷺が見られたことは驚きでした。

写真下は新潟市西区を飛ぶ朱鷺

時空を超えた歴史探索の旅
白石 仁章



前回の寅年の時には、まだ寅さん同様、のんきな独り者でしたが、何時の間にか妻子持ちとなり、寅さんのようにのんびり一人旅を楽しむ機会もなかなかなくなった今日この頃です。しかし、史料の山の中で生活しながらも、時空を超えた歴史探索の旅は今年も、そしていつまでも続けたいと思っています。とは言え、自他共に認める程度の方向音痴ですので、旅の途中で道に迷ったときなどは、ご助言の程お願い申し明けます。今年はラトヴィアがソ連に併合されて70周年ということを、当時三国同盟を結んだ日本との関係で考えていきたいと思います。（外務省外交史料館）

娘ちひろの欧州演奏旅行
矢田 寛子（料理スタジオ主宰）



矢田夫妻とちひろさん



ソフィアでの演奏会

娘のちひろは、昨年ヨーロッパでの演奏が主体で、特に、ブルガリア・ソフィアのソフィア国際音楽祭40周年に招かれ、弾きました国立ソフィア・フィルハーモニーとのグリーグのピアノ協奏曲は印象的でした。1楽章終了後、拍手が沸き上がり、曲終了後も、拍手とブラボーコールが長く続き、感動的でした。「繊細で、ロマンチックで、感動的で」と、称賛され、ソフィアは2度目ですが、すっかりファンができました。最初の訪問以来、日本人とわかると、ちひろの話題になると伝え聞いております。

大使館勤務から帰国しました
西山 智也



会員の皆様、この度、協会に入会しました西山と申します。

小生、昨年2月まで在ラトビア日本国大使館に勤務しリガ在住をしていました。2008年の歌の祭典では、協会一行と共に歌の祭典の本番に同行させて頂きましたので、御存じの方も多く居られる事と思います。今後とも、協会の活動にお手伝い出来る事がありましたら、微力ながら協力させて頂こうと思いますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

本年が会員皆様方にとって良い年であります様お祈り致します。（筆者は帰国後民間会社に勤務）

同期の友情
徳田 浩（柔道新聞編集長）



古今東西、同期は理屈では割り切れない強固な友情・絆で結ばれる。特にクラブ活動仲間は顕著だ。同じ釜の飯を食べ、苦楽を共にしながら青春を燃焼した共通の思い出は生涯忘れられない。

我々早稲田グリー1956年卒の同期で作曲家の鈴木淳が主催する合唱コンクールに、同期6名がOWG6の名称で出場したのも、同期の友情が出発点だった。新作の女声トリオ曲「たちどまればいいさ」を盛り上げるために、テレテ局、プロダクションと共催で行われたものだが、全国から103チームが応募し、決勝大会に23チームが進出した。3人から30余名のチームは当然ながら若者が多い。「全員後期高齢者チームで大会と作品を盛り上げようではないか」と一次の音源テストをパス。“鈴木に恥をかかせてはなるまい”と学生時代さながらの猛練習をした。声楽家で指揮者の山本健二（第2回指揮者交流でリガ大聖堂少女合唱団などを指導）もメンバーの一員として猛練習に加わった。

結果は審査員全員が我々を1位に選んだ。しかし、鈴木は成績発表で「最高点はOWG6だったが実は私のグリークラブ時代の仲間。優勝を辞退してもらい、特別優秀賞を差し上げることにした」と正直に打ち明けた。私が代表して表彰を受けたが、壇上で鈴木とアイコンタクトで“全て了解!”。しかし、客席にいた出場者、関係者、聴衆から優勝チーム以上の賞賛と祝福の拍手を受けた。

◇

ちなみに、山本健二が自らの喜寿記念にこの程リリースした23枚目のCD「潮騒のうた」が、西日本新聞コラムで取り上げられたり、このCDの数曲がHHKラジオ深夜便で放送されるなど、注目が高まっている。タイトルの「潮騒のうた」は、故・森繁久弥氏の魂の叫びというべき詩を、作曲家平野淳一が8分43秒の大作に仕上げたもの。山本の切々たる歌唱は実に見事で、歴史に残る日本歌曲の誕生を感じた。他に代表的抒情歌など15曲を収録して2100円。是非ご一聴をお薦めしたい。銀座ヤマノ楽器店で販売している。

クリスマスにハンサムな男児出産
大使館のオレグスさん夫妻

お馴染みのオルロフス・オレグス氏の夫人愛子さんが12月25日、クリスマスの朝6時半に男児を出産。





約3.3kgで母子ともとても元気です。「クリス蓮　オルロス田中」と命名されました。（日本読みは「オルロフス田中　クリス蓮」）。クリスマスに生まれた、賢くて男らしく、ハンサムの意味だそうです。

【情報断片】ページを節約するために頭を捻りましたが、やはり大事な写真や情報漏れが多々ありました。定期的にHPをご覧くださるようお願い申し上げます。

【情報断片】1月20日のラトビア語教室は、受講生憧れの黒澤歩さんをゲストにお迎えして大いに盛り上がりました。基本的に日本に定住されますので、今後は本紙にも度々登場願いたいと願っています。

ラトビア語教室からの報告

Labdien！　ラトビア語教室がスタートして早や2年半が過ぎました。

昨年10月の授業で行なった「ジェスチャーゲーム（Mēmais šovs “声なし音なしのショー”）」では、「誰が」「どこで」「何をする」が書かれた紙をそれぞれの封筒から引き、自分に当たった単語（もちろん表記はラトビア語！）をジェスチャーだけで表すゲームを行ないました。当然「トップモデルが」「図書館で」「ビールを飲む」のような何の脈絡もない文になることもあります。同じ「飲む」でも「コーヒーを飲む」か「紅茶を飲む」かなど、細かい指定があります。2チームに分かれ、ジェスチャーをする人は役者になったつもりで課題を演じ、何を表しているのかをラトビア語（！）で早く答えたチームにポイントが入ります。興味深かったのは、自分のジェスチャーの答えを、たとえ相手のチームに言われてしまったとしても、思わず「Jā！（そうです！）」と、多くの人が、つい喜んでしまったことです。これは、自分が伝えたいことを相手にわかってもらえた素直な喜びであり、ゲームを通してコミュニケーションの大切さを再確認した機会でした。



1月20日の教室　この日はラトビアで最も著名な日本人、黒沢歩氏がゲストで参加し全員を感動させた。2冊の著書を持参した佐々木さんは、「昨夜は興奮して眠れなかった」。

大使館のオレグスさんには、ラトビア人ゲストの調整などで大変お世話になっています。また、授業後すぐに授業記録を作成してくれる事務局長の植木さん、毎回欠席者に授業のテープを送ってくださる穎原さん、いつも授業の様子を見守ってくださる加藤さんにも助けられています。

そして何よりも、仕事や学業、ご家庭の用事で多忙な中、授業に出席し、私の出す宿題と格闘したり、個人的にメールで質問をしたりして、未熟な講師に熱心について来てくださる受講生の皆さんあっての教室であることを毎回確認しています。この場を借りて受講生の方に感謝させてください。

外語大の2008年夏期講習受講をきっかけに教室に加わった末兼直実さんのラトビア語学習の進歩には目を見張るものがあり、私たちに刺激を与えてくれました。4月からはドイツ（マールブルグ大学、紛争予防・平和構築課程）に1年間留学されますが、その向学心を活かして充実した留学生活を送られるよう、受講生の皆さんとともに願っています。**（講師：堀口大樹）**

「ラトビアへ行きたい思いが強くなりました」。

アールバルデイス·ラビ·ラビ·田中です。昨晩は今年初めての教室。 正月ボケがまだ抜けてない私には身が引き締まる内容でございました。 ゲストのプレゼンも面白く、ラトビアに行きたいという思いが強く なりました。正月に大阪で美味いものを食し、友人や家族に会い“長い間住んでいた故郷はええな”いう思いでしたが、今年でちょうど東京に来て5年目になりますが私のような好奇心の強い人間には東京はとても面白いです。ラトビア語との劇的な出会いもそうですが、なかなか大阪にいてたら経験出来ないようなことが多々あります。美術館や映画館、コンサートも大阪で見れないものが多く、珍しい国の料理、そして私の大好きな本が神保町で安く買える等この5年に様々な経験が出来ました。また様々な人がいてるのも東京でございます。東京(首都圏含む)にずーと住んでいたら、こういう環境はあたり前に感じるかも知れませんが、東京を離れてみればわかりますが、こういう環境はなかなか地方にはございません。大使館も勿論ございません(笑)。人生一度きりでございます。楽しくそして有意義に日々を生きたいという思いが東京に来てから強くなりました。決して大国でないラトビアの、仕事や日常生活であまり役に立つことがない言語を真摯に勉強されている皆様とは末永くお付き合い頂きたいと思っております。今年も楽しくラトビア語を勉強しましょう。祝東京上陸5周年！　大阪人には珍しく納豆が大好きなアールバルデイス·ラビ·ラビ·田中

※筆者の田中謙治さんは他の言語も堪能でゲストに積極的に質問されるなど、教室の活性化に一役買っておられます。（事務局　植木佐代）

2年目を迎えた合唱団「ガイスマ」

昨年の1月13日に仮称「ラトビアの歌をうたう会」として第1回の練習を23名のメンバーで始めた合唱団は、1歳の誕生日を過ぎ、44名のメンバーに成長しました。合唱団名も光というラトビア語「ガイスマ」と皆で決め、山脇卓也指揮者とラトビア語の堀口大樹先生の指導で、楽しく月2回の練習を続けています。



2010年初練習（1月18日）　この日は珍しく男声が勢揃いした

歌った曲も増えてきましたが、いつの日かラトビアの素敵なハーモニーを響かせられたらと夢見て、2年目の今年はぜひ発表の機会を持ちたいとの機運が高まっています。

山脇指揮者もガイスマがラトビアの合唱作品の素晴らしさを一人でも多くの方に紹介、聞いていただく機会を持つよう、ワークショップ、コンサートなどを提案。行く行くは日本とラトビアの合唱活動を通じて合唱団の招聘、訪問などラトビアの合唱団と交流したいなどと、更に夢は大きく広がります。

そのために今ガイスマに必要なことは、

1、ラトビア語（特に発音面で）の習得
2、ハーモニー、発声面でのレベルアップ
3、メンバーを増やすこと

の3点を挙げています。

メンバーは最初から加わった方の他に、ラトビア語教室から来た方、協会のホームページでガイスマにたどり着いた方など、ラトビアとラトビアの音楽が好きな人ばかり。でもまだまだ募集中です。合唱の好きな方の参加をお待ちしています！！

12月28日には忘年会を渋谷のパンダレストランで開催。29名が出席し、楽しく賑やかに1年の締めくくりをしました。1年間の練習を振り返り皆勤賞2名（多賀清雄さん、穎原信二郎さん）、精勤賞3名（加藤民子さん、加藤晴生さん、三巻義夫さん）に特製の賞状と記念品を贈呈して表彰すると、来年は皆勤賞が取れるよう頑張りたいとの声があちこちで聞かれました。また、山脇さんが指揮する「お江戸コラリアーす」が昨秋の全日本合唱コンクールで金賞を受賞されたことを祝って、ガイスマからのお祝いと記念品を贈呈。盛大な拍手が湧きあがりました。

最後にラトビア語の「ドレミの歌」を歌うと、東混の佐々木さん、渡辺さん（共にラトビア語教室のメンバー）が子どもたちに指導しているというボディーアクションを紹介。全員子どもに帰って大真面目に真似をして大笑い。楽しい締めくくりとなりました。

2年目のガイスマが素晴らしい歩みを進めるために、皆様のお力添えと、新しいメンバーの参加を願っています。**（幹事長：髙仲和子）**

短信

素晴らしい継続の力
桜楓合唱団第40回定期演奏会

結成45周年記念第40回桜楓合唱団定期演奏会が11月18日、すみだトリフォニーホールで行われ盛会だった。今年は40年を振り返る「いつも風 流れる川」（林光）、「Missa secunda」（松下耕）、「Liederslieder」（ブラームス）、「唱歌の四季」（三善晃）という多彩なプログラムを、松下耕、藤井宏樹、浅見佳奈子の豪華な指揮者群がそれぞれ情熱を込めて熱演、聴衆の感動を誘った。

この合唱団を聴く度に継続のパワーを痛感するが、創団以来、若々しく歌い続ける多くのメンバーの姿は敬服の他ない。毎年欠かさず開催し、数々の委嘱作品を初演して日本の女声合唱界に多大な貢献を続ける。今回も現役と共演ステージも含めるなど、彼女たちの歌への思いはしっかり後輩たちに受け継いでいる。今年も10月30日（土）に同じ会場で開催される。協会合唱団「ガイスマ」の髙仲和子幹事長、「ラトビア語教室」の植木佐代事務局長もこの合唱団のメンバーで、協会運営にも積極的に推進役を担っている。